

JSRMPM 第6回年次総会によせて

酒井 亮二

国際予防医学リスクマネジメント連盟 (URMPM) 理事長

日本予防医学リスクマネジメント学会 (JSRMPM) 理事長

URMPM の設立目的は、20 世紀末からの社会経済のグローバル化に伴って地球規模で増大する様々な健康リスク・生存リスク、つまり社会生活上の新たなリスクに対処するためのリスク戦略の策定には、新しい合理的な器が世界的に必要なになっているとの認識によるものです。その新戦略はどうあるべきでしょうか？

社会経済グローバル化は、20 世紀末に欧米の基礎科学者たちが盛んに提唱した「複数の異分野の知識の意図的な融合による加速度的な技術革新の創造」がもたらした果実でした。同じ考え方を社会生活にも適用すれば、社会生活に対するリスク戦略が飛躍的に向上する可能性が高いことから、URMPM の設立には「国際規模の学際研究の充進」という観点で導入され、2003 年 3 月に東京で開催した設立総会で世界各地の第 1 線級の学者が集まり、共同提案としてスイスに本部を置くことが決まりました。日本予防医学リスクマネジメント学会はその一部の団体として設立が承認されました。設立総会では、ミクロのリスクからグローバルなリスクまで、さまざまなリスクマネジメント科学の向上が不可欠であることが世界各地からの参加者と共有できた結論の 1 つとなり、全世界に医療でのリスクマネジメントの団体が燎原の火のように続々と設立されました。

その後、URMPM 本部は 2005 年末にスイス・ローザンヌ市から東京に移転しました。最大の理由は、「安全は細かなことの積み重ね」であり、日本は平安時代から世界にまれな繊細かつ高度な芸術(Fine Art)を悠久として保有し、細かなことを大変上手に行う日本での安全研究の果実は将来に世界一の水準に到達する可能性が高い、と予測した結果です。

日本を対象に考える時、今日の日本は医療・福祉を中心に大部分の人々がかつて予想しなかった様々な悲劇に遭遇しています。基本的には人口減少と人口の都市集中によるものと考えます。生命科学によれば、生命の本質的な目的は自己保存であり、多様な環境リスクに対応するために生命は分化というリスク戦略を立てました。「分化とそのシステム化(協働)」は厳しい環境の変化に自己保存の多様性を拡大します。この生命の基本原理は高等生物での個体レベルと群レベルまでに共通に見られます。したがって、社会経済リスクの対応にも「分化とシステム化」が適用されています。「分化とシステム化」は、結局、社会生活という側面では専門分化とそのネットワーク化を意味します。ここに、「健康リスクに対応するリスク管理としての医療」に高度専門化とそのネットワーク化が必然的に生み出されます。

しかし、人間の場合は、自己保存のためのリスク戦略として、「分化とシステム化」以外に、もう1つの特異的な戦略が存在します。それは、「集中化」という行動です。あることに1点集中する行為がメガ都市を生み、新しい巨大なエネルギーを開発し、新技術を創出し、さまざまな生産性を飛躍的に向上しています。「集中化」は、少ない人口と資源の中で持続可能な道を得るための極めて重大なリスク戦略です。「集中化」を医療と福祉の活動に適用するとき、スーパーホスピタルを中心とした新しい生活空間造り、医師派遣拠点センターの常設、などが考えられます。「集中化や拠点化」により少ない人材で飛躍的な富を創出できることは人類の普遍的な知恵です。

医療サービスの本質は何かについてイギリスでは20世紀の最後の数世代にわたり大規模な研究が展開され、それは「患者満足度」であると結論づけられましたが、この患者満足度の究極ゴールが「持続可能な安らぎと豊かさの医療」であることは自明です。したがって、この究極のゴールもまた「分化とシステム化」ならびに「集中化」によってもたされると考えられます。

さて今回、JSRMPM第6回年次総会の目的の1つは、「リスク管理の1つの大きな要素である人的資源」に係るところの「患者参加型医療」、つまり医療提供者と医療消費者の協働的医療の在り方を検討することです。「患者参加型医療」は患者満足度を高める手段としてイギリス医療界で発案されました。今、イギリスでは患者参加型医療を推進するため国立支援センターが全土に開設され、この流れはアメリカにも波及し始めていますが、日本の医療界では必ずしも十分に理解されておりません。そのため、この分野で最先端のさまざまな取り組みを日本で1番活発に展開している静岡がんセンターの山口総長にこれまでの活動をご紹介いただきたく、お願いにあがりました。

また、健康のリスク管理の世界では診療での危機管理の在り方の検討が必要になっており、「危機管理医学」という用語を新設し、主として日本の医療界の方に検討をいただきまいりました。緊急度の高い危篤な患者さんに対し適切な危機管理を提供することは救急医療で1つの例を見る様に様々な医療の現場で必要ですが、これまでに十分に検討されていない医療命題の1つです。そこで、日本最大の健康リスクである「がん」を事例として、診療の現場ではどのような危機管理が必要であるかを検討していただきたいと密かに考えました。今回、はからずも山口総長からこの難問に対して大変明快な方向性を総会プログラムでご提示いただきけましたことを敬意の念をもって感謝いたします。

このように、JSRMPM第6回総会の内容は、健康リスクに対する臨床現場での新しいさまざまなリスク戦略と危機管理戦略を提言いただけることになり、本総会は「持続可能な安らぎと豊かさの医療・福祉」での新しいモニュメントであるとの結論にいたりました。21世紀の新しい医療・福祉を構築するという真の国際精神にしたがう山口総長と院内外の方々の情熱による素晴らしい総会プログラムに参加させていただく機会を得て、1学会員として法外の喜びです。